



生計手段を手に入れたインドのダリット女性たち

「津波」から一年 ―破壊された生活のなかで聞う人びとの今

無数の尊い命が一瞬にして「津波」に飲まれたあの日から一年——大切な人を一瞬にして失い途方にくれた人びとは、その後少しずつ立ち上がり、明日を見出すための厳しい闘いを続けています。日常的な報道がほとんどなくなり、国際NGOや外国政府機関なども次第に引き上げ、人びとやメディアの関心が薄れていくなかでの奮闘です。

IMADRならびにIMADR-JCは、現地のパートナー団体が復興に励むスリランカやインドの人びとともに活動できるよう、広く支援を呼びかけてきました。おかげさまで、「津波」から1年となった2005年12月26日までに合計18,868,951円がIMADRに寄せられ(個人:271人から3,137,493円/団体:46団体から13,408,131円/20の団体・個人による、カンパ活動:2,323,327円)、スリランカとインドに合計17,909,973円を届け、被災者への緊急支援ならびに復興支援活動に充てることができました。

その活動の過程で私たちは、困難と向き合いながらも前向きに生きる多くの人びと――とりわけ、もっとも困難な状況に置かれた女性や被差別マイノリティ当事者――と出会いました。彼/彼女らがIMADRの支援を通じて立ち上がり、より長期的な運動を組織化しつつある姿は、私たちに、「何のための国際連帯か」という問いへの答えを投げかけているように思います。

IMADRの救援・復興活動を現地で実施しているパートナー団体から、一年間の活動を振り返る報告が届きましたので、抜粋を紹介します。(IMADR事務局)

スリランカの現状

ニマルカ・フェルナンド (IMADRアジア委員会代表/IMADR理事長)

WE DO CARE

(私たちはあなたを忘れていない)

IMADRアジア委員会のスリランカにおける取り組みの第一段階は、緊急支援・災害対処だった。IMADRは、2ヵ月半にわたり、避難民キャンプや寺院、教会での避難生活を余儀なくされた人たちに対して、とりわけ女性と子ども、弱い至場におかれた人びとに重点を置いて緊急支援活動を行なった。初期段階では、対応措置に大幅な遅れをとった。IMADRは、政府の援助を受ける可能性が最も少ない被災者に援助物資を届けることに集中した取り組みを行なった。

紛争後の状況に対する取り組み

IMADRは、津波が起きたのは紛争後の社会なのだということを踏まえて救援活動に取り組み、民族間の軋轢を深めることがないよう努力してきた。IMADRは、支援物資の公平な配分を求める主張を構築した。もう一つの対応すべき問題は、海岸線から100~200メートル以内に住むコミュニティが家に帰ることを禁止する政府の命令だった。IMADRはこの問題を人権問題としてただちに取り上げ、コミュニティへのエンパワーメント、啓発を開始した。さらに、住む場所を失った人たちが元の住処に戻る権利、また住む場所を自分で選ぶ権利を守るための国や

地域、国連レベルの市民運動に参加した。

南部では、人びとが政府からの援助を受け取り、自らの権利を求めるため、3~4人の専従スタッフを置いた複数のセンターを設置した。支援を求めてそこを訪れる被災家族の実情を伝え、また政府に対して政策指針を提案するため、3月に記者会見を行なった。また、8月には、政府に被災者の声を届け、政策提言活動と政府との対話を維持するため、草の根のパートナー団体とスリランカ全土から参加した350人の被災者とともに「津波民衆法廷」を開いた。

IMADRの活動でもう一つ重要な要素は、長期的な教育支援によって、子どもたちが津波の被害から立ち直る手助けをすることである。例を挙げると、350人の子どもが学校の制服を受け取っており、また将来的には津波や戦争で両親を亡くした子どもに対して奨学金を出すつもりだ。教育を重視したこの活動は、特に津波後の状況下で子どもが人身売買に遭う危険性が増加する恐れがあることを踏まえた、人身売買に対するIMADRの取り組みの一環でもある。

災害下での女性の人権とエンパ ワーメント

津波後のIMADRの取り組みにおけるもう一つの焦点が、女性の人権と生計手段の提供である。国内全域で200人の女性が、収入を得るための支援を受けた。かご作り、乾燥魚作り、裁縫、小規模自営商店の経営、朝食を出す飲食店経営やビスケット作り、布の織物など、伝統的な

ものから非伝統的なものまで広範な活動 を支援した。これらの女性は、マイノリ ティまたは低カーストに属しているか、 津波や紛争の被害を受けた人たちであ る。現在のスリランカでは、夫を亡くし た女性たちに2つの世代がある。紛争で夫 を亡くした世代と、津波で夫を亡くした 世代である。IMADRは、これらの女性た ちに焦点をしぼり、物資を配給するだけ でなく彼女たちが自立する支援を行なっ ている。また、津波で夫を亡くした20人 の女性の証言集を出版しており、英語と タミル語に翻訳することになっている。 この本は(多数派の言葉である)シンハラ 語で出版されている。収録されている体 験談はムスリム人とタミル人が人口の大 半を占めるアンパラ県の被災者のもので あり、多数派のシンハラ人がこの地域の 女性たちの受けている複合的差別につい て知ることは、IMADRの平和構築の取り 組みの一環として重要だと考えたからで ある。

政府による援助

スリランカ政府は、5人家族に対して乾 燥食糧として1人あたり週375ルピー分(約 320円)を支給した。これは175ルピー分の 小麦粉と食物油、砂糖などと交換できる 食糧配給証と200ルピーの現金からなる。 また、政府はそれぞれの被災世帯に月 5,000ルピー(約¥6,000)を支給すると約束 した。ところが10ヶ月経った時点で、ほ とんどの家族が約束の支給額を3か月分し か受け取っていないことが分かってい る。政府は11月の大統領選挙直前、後押 しする候補の宣伝のため、さらに5,000ル ピーの支給を約束している。被災者に対 する銀行のローン貸し付けは正常に行な われていない。さらに、家を失った人び とのため約40,000軒の家が緊急に建築され る必要があるが、まだ約10.000軒しか着工 しておらず、完成しているのはわずか約 300軒のみである。人びとはいまだに仮設 住宅で生活している。被災地域では頻繁 に洪水が起きており、それをしのぐため の適切な設備もないため、再び住む場所 を失う人たちが出ている。2005年6月、世 界の支援国は40億ドル(4800億円)の支援 金提供を約束したが、実際にスリランカ 政府が受け取ったのはその半分である。 さらには、津波から6ヶ月後になってもそ のうちの約13パーセントしか使われてお

らず、しかもそのほとんどがインフラ設備の再建に使われているとの報告もある。

多くの人の生活に多大な打撃をもたらした津波から一年が経ったが、元の生活に戻ることが出来たのはほんの一部の人びとである。IMADRは、被災者を組織化し、その声を広く届けることを目指して力を尽くしている。

インドの現状

ニマルカ・フェルナンド ブルナド・ファティマ・ナティサン (SRED (農村部教育開発協会)代表/IMADR理事)

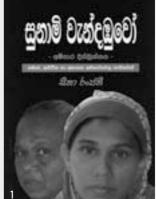
2004年12月26日、タミル・ナドゥ州では何千人もの女性、子ども、ダリット(カースト制度下で「不可触民」として差別されてきた人びと)、漁民、イルラ(先住民族)、農民が、津波によって家、家畜や農地、船や漁網を失った。一年経った今も、もとの暮らしを取り戻すための苦闘が続いている。

「届かない人」に届ける支援

津波の被害を受けた人びとの中でも、 最も苦しんだのは女性たち、とりわけ政府の救援・復興支援計画から完全に疎外されたダリットの女性たちだ。政府は、 海岸周辺に住んでいるのは漁民だけだと 考えており、したがって政府の救援・復 興援助を受けるべきなのも漁民だけだと いう考えだ。このような視点のもと、政府が提供する巨額の金銭的援助は漁民たちのみに割り当てられ、政府の救援・復 興活動は漁村でしか着手されていない。

漁業や関連の営みに依存して生計を支えている人びと、とりわけダリットやイルラたちは、政府機関によって完全に無視されている。これらのコミュニティは、漁船の手入れ、漁網の掃除など、漁民が漁をするのを補助するような役割を担ってきた。ダリットの女性たちは漁民から魚を買い、近隣の村落で売っていた。このような人のすべてが、津波の惨事によって生活のための収入源を失ったのである。

津波の被害を受けたダリットやイルラは、ほとんどのボランティア団体の救援・復興支援活動からも同じように疎外されている。タミル・ナドゥ・ダリット女性運動は津波直後の救援活動中にこのことを知り、真実を明らかにするために











- 1)IMADRが出版した、津波で夫をうしなったアンパラ 県の女性の証言集。
- 2)津波で夫と家をうしなったラハマド・ウマさん(55歳)
- 3) ラハマド・ウマさんの娘、パーミア (24歳)も夫をうしなった。機織りが仕事。
- 4)マルスカさん (27歳)の村では、922人が亡くなった。 生計手段として使われていた織り機も流された。
- 5)多くの人びとはこのように雨に弱い仮設住宅で暮らしている。







インドでは、IMADR/SREDの支援を受けた人びとが、食糧(3)のほか、生計手段につながる牛(1)や手押し車(2)などを手に入れた。

調査を開始した。

タミル・ナドゥ・ダリット女性運動は 津波の被害を受けた女性たち、ダリット やイルラの人びとへの支援を行なってき た。まず海岸沿いの13の地区を調査し、 IMADRの支援を得て、この調査にもとづ いて救援物資を配布した。

生活の再建

IMADRの支援を得て、SREDはカンチープラム県、ティルヴァルール県、ヴィルプラム県の15村で、1136のダリットの家族に生活必需品を供給した。さらに、マハバリプラムの近くのサランクッパムでは、壊れた家の再建のため、45世帯に245のセメント袋が供給された。スレリカドゥ村では、18のダリット家族がそれぞれ75キロの米が入った袋を受け取った。

セルヴァマニさんは、夫と壊れかけの 家に暮らしていたところに津波を受け た。SREDとIMADRは、彼女たちに小さ な家を建て、安全な住居を与えた。

生業を取り戻す、未来を取り戻す

カンチープラム県の多くの村々も、船、手押し車、ミシン、牛や山羊など、 生計手段となるものを受け取った。このような支援によって、約200家族に対して 助けとなることができた。

カンチープラム県でIMADRとSREDからミシンを受け取った31人の女性を代表して、ヴェンプラサムのウマさんは次のように発言した。

「津波は私たちの生活を壊滅させ、子どもたちの未来を見通しのないものにしたが、あなた方の迅速な援助は、長いトンネルの向こうの光を見せてくれた。」

カンチープラム県の7つの村に住む51のダリット家族に手押し車が提供され、これによって彼/彼女らは、有名な観光地であるマハバリプラムで小規模な行商をして新しい生活を始めることができるようになった。彼/彼女らが持っていた手押し車は津波に流され、収入源が無くなってしまっており、イルラッタイクッタイ村のシヴァガミさんは、手押し車を受け取ったことで人生に新しい可能性が生まれた、また家族が生活必需品を得るのに大いに役立っていると言っている。彼女や支援を受け取ったほかの人々は、SREDとIMADRの迅速な行動に対して心

からの感謝を述べている。

また、5つの村の家族に61頭の乳牛が与えられ、牛乳の販売という収入源を提供した。牛の飼育をはじめた女性たちは、市場で牛乳を売るだけでなく、子どもに飲ませることもできるようになったと言っている。ここで支援を受けた62人のうち29人が、夫を失った女性だということは重要だ。カルパッカムの近くのカダローレ村に住む夫を亡くした女性であるカストゥーリさんは、2人の子どもを育てるのに大変な苦労をしてきた。牛のおかげで子どもに毎日食事を与えることが出来て、夢のようだという。

マハバリプラム村の2つの靴職人世帯は、靴の製作・修理をする小さな店を建てるため、資金援助を受けた。元の店は津波にさらわれてしまっていたので、新しい店を建てることで再び生活手段を得ることができた。職人たちはすでに新しい店で働き、自分たちの生活を支えている。

津波による破壊は、漁民だけでなく海岸近くに住む他の人びとにも被害をもたらした。石細工職人のセンティクマールさんは、津波の戻り水が工房に流れ込んだ際に石切り用の機材や設備をすべて失った。彼によれば、「SREDとIMADRの支援がなければ、資金を得るために高利貸しのところに行き、人生を台無しにするところだった」という。彼は他の5人の石細工職人とともに、生業を再開するための資金援助を受けている。

カンチープラム地域のサドラスクッパムは、津波によって最も深刻な被害を受けており、そこに住む漁民たちは漁船や漁網を失った。SREDとIMADRは船を提供し、20人の漁民が一緒に生計を立てていけるようにした。この委員会のリーダーのムルゲッシュさんは、船が彼らの生活に活力を取り戻し、村の漁民達の間に協力関係と仲間意識をもたらしたと言っている。

同じく沿岸地域で漁業関係の仕事をしているイルラ先住民族には、漁や薪集めなど、生業を続けられるような物品が提供された。パチアンマルさんによると、彼女の家族に与えられた物品は、食物を買うための収入を得るのに大いに役立っているという。

翻訳:小笠原純恵(IMADRインターン)